

至福の二一年

木村 汎ひろし

“日文研”での丸二一年間は、極楽だった。早（？）朝、出勤すると、コモンルームのお嬢さん方が笑顔で研究室の鍵と伝言メモを渡してくれる。研究に疲れると、コーヒーがしゅんしゅんと沸いているコモンルームへ出掛ける。世界中から集まった学者たちと談笑して、行き詰った研究のヒントを得るなどして、再び机に向う。昼食は所内付属の「赤おに」で済まし、研究室のソファで二〇分間、仮寝。再びコーヒーを飲んで、深夜まで研究に没頭する。

研究費は潤沢で、外国人学者の招聘を依頼する国際電話などを自らの研究室に居ながら公費でかけることすら可能だった。もし研究上の支障が生じるならば、管理部へ足を運べばよい。彼ら事務方の人間は、我儘きわまる学者を助け、わが国の日本研究の水準を上げることが、ひいては国際学術交流に資する道である。こう確信してやまない実に有難い集団だからである。

なかでも、私がとりわけ感動し重宝したのは、図書館（正確には、情報管理施設）の文献資料取り寄せサービスだった。何しろ研究上必要な文献を一枚のメモに記し、係の人に手渡せばよいからだ。数日経つか経たないうちに世界中の図書設備から探し出された当の資料が、時には現物で、さもなければコピーの形で届く。個人では到底手に入らない資料や情報が日文研の名声、信用、相互サービス、ネットワークのお陰で、ほとんど瞬時に無料で入手可能にな

る。これは、まるで奇跡だ。

ちなみに定年退職後の私が右に記したほとんど全ての便宜を瞬時にして喪ったことは、改めてつけ加えるまでもないだろう。午前中、ときには午後も費やして、家内——わが家では「専務」と呼ぶ——との二人からなる零細企業方式で、日文研時代の効率の何十分の一かをやっとなさこなしている。

二

もとより、私は歴代の所長をはじめ常勤、非常勤、客員教官の同僚たちから数々の恩恵と刺激を受けた。今回は、紙数の制限上、そのうちの一点に限って以下、記すことにしよう。それは、論文の書き方に注意するようになったことである。

日文研に赴任してまず気づいたのは、文科系の人間が多いせいとか、所員たちのなかに他の集団では滅多に見つからない文章道の達人が揃っていることだった。噂によると、「表現能力が劣る者は、研究者としては不適格」。これが、梅原猛初代所長による所員選びの一つの基準だったという。（これを聞いて、政治学担当の私の任命が、他の一四人の教授に比べ一年も遅れた理由にはじめて納得がいった。）たしかに、梅原所長自身が小説まで物される名文家なのである。一例を挙げるに止めても、著作『法然の哀しみ』のネーミングには唖らされる。

赴任後の私がまず参ったのは、杉本秀太郎教授の文章。書き出しの一行を読んだだけで、日本一の文章の達人ということが明らかになる。先生は私の存在など全く意にとめられなかったが、私が唯一ロシア語を読む同僚だということが分ったあとは、ロシア文学についてポツポツと話し相手になってくださるようになった。チェホフの短篇のなかでは『かもめ』がお好きだ

とか、司馬遼太郎の作品では『ひとびとの聲音』^{ひとびと}が一番よいなどと語ってくださった。慌ててそれらの作品を読み直してはみたものの、所詮感性の劣る私には先生の意味するところが今ひとつ分からなかった。

杉本先生が“西”の名作家ナンバー・ワンならば、“東”のそれは間違いないく芳賀徹先生だろう。フランス文学を専攻する稀代の名作家、二人が、同時期に日文研に在籍したことは、まさに奇跡としか評しようがなかった。「人たらしの名人」梅原所長のみがなしうる凄腕人事の結果に他ならなかった。その恩恵を受けて、私ごとき非文学的人間ですらも、お二人をキャップとする北海道アイヌ探訪旅行へお伴できる機会などを享受した。杉本氏は、文章のみならず、暇さえあればピアノに向い、デッサン帳を広げる多才多趣味のルネッサンス人間だった。芳賀氏も負けていない。蕉村にたいする氏のいれ込みと業績は、氏自身の単に詩歌ばかりでなく、絵画にたいする情熱と造詣の深さを物語っている。氏の名人芸の文章からは単にビジュアルな映像のみならず、馥郁たる香りまでもが立ち昇ってくるのだ。

私はごく短期間、日文研研究主幹の一人に任命され、どうしても二、三の公文書を作製せねばならぬ羽目に陥った。そのとき、私の文書に真赤になるまで朱を入れたのは、石井紫郎教授だった。先生は、日本法制史の第一人者であるばかりか、東大副学長を勤めた後、日文研へ赴任されたばかりであった。東大法学部出身の高級官僚を相手にして一言も文句を言わせない文章を、自らワープロを打ってすらすらと作製されるのだから、参った。

日文研で唯一困ったのは、自分のメールボックスを開く度に三日に一度くらいの割合で、たんに梅原、河合隼雄、山折哲雄ら歴代所長ばかりでなく、研究熱心な所員の出版物が献本されているのを見出さねばならないことだった。何時まで経っても、そのようなプレゼントにたい

してお返しができない自分が不甲斐なく、つくづく惨めに思えるからだった。有難い献本とはいえ、それら全てに目を通しては、自分自身の研究や執筆の時間がなくなってしまうことも憂慮された。そういう訳で、在職中、井波律子氏による旺盛な中国文学研究を十分にフォローし損なったのは、残念至極だった。退職後ポツポツ読み直してみても、井波氏もまた抜群の文章力の持ち主であることが改めて分り、脱帽した。

三

日文研退職後は、老人が邪魔すべきではないと心に銘じ、一、二度の祝賀会参列を除いては日文研へ足を向けたことはない。それでも、新聞紙上などで日文研の発展を興味深く見守っている。とりわけ、現教職員の方々の活躍を知る度にOBの一人としてこのうえない喜びにひたっている。文章という点に限って述べると、最近例えれば次の方々が私の目を引いた。

猪木武徳氏。父君は、京都大学名誉教授（政治学）の猪木正道氏。正道教授は、文学作品では短篇小説よりも、ドストエフスキイ、トーマス・マンなどの長篇小説を好まれた。武徳氏も父親譲りの良き伝統を引継いでおられ、読み込む対象が古今東西の巨人ぞろいであることには改めて驚かされる。アリストテレス、アダム・スミス、トックビル、福沢諭吉；等々。新しいところでは、誰もが読んだ振りだけで済ましがちなトマ・ピケティの膨大な書物を原典でじっくり丹念に読んでおられる。ここまでは父君譲りであるが、文章表現となると少々異なる。正道先生は歯切れがよく明快で、戦闘的でさえある文章を書き、読者を惹きつけた。ところが、武徳氏は、いかにも二代目らしく、おっとりとした筆使いで、悠久の真理を求めて諄々と説かれる。われわれ専門外の者から見て誠に器の大きい学者だと敵服せざるをえない。

井上章一氏は、未だ若い内から「井上節」としか他に評しえようのない独特の語り口を確立し、一家をなされた。たとえば近年の『京都ぎらい』にも、それが現れている。誰からも決して批判されないように前もって用心深くしつこいまでに四方八方に防衛網を張りつつ、自身の所論を進めてゆく。その後になって、結局、自説以外の正論が世の中にありえないことを、慎しみ深く、しかし断乎として主張される。この手法こそは、まさに京都人の生き方の真骨頂ではないか。すべての読者が気づき同意するように、井上氏ほど京都を愛し、京都最良の人間も珍らしい。そうでなければ、猪木武徳氏と同様、「京都の名門、洛星高校」でフランス語を学んだ語学の達人が、故桑原武夫、高坂正堯氏などと同様に東京人相手に意識的に京都弁をししゃべりつづける筈がなからう。

要するに『京都ぎらい』は、新書版の分量に過ぎないものの、会田雄次著『アロン収容所』と並びたつ戦後日本の画期的出版物である。かつてマルクスは、階級の差別さえ根絶すれば、人類全員が幸福になる共産主義社会に生きることが可能になる——このようなナイーブきわまる性善説にもとづく史観を提唱し、事実によって見事に裏切られる羽目になった。人間は人間である限り、自分とは異質な存在を発明し創り出し、彼らにたいする差別意識によって己の優越感をエンジョイしようとする。この業ともいえる人間性の本質を京都人に託して改めて剔抉してみせた点で、『京都ぎらい』は和辻哲郎『風土』以来の快挙だろう。

梅原猛初代所長は、故園田英弘氏を伴って上京し、文部省の屋根裏に住み込むまでして日文研の創設に命を削られた。そのような苦勞は、実りの秋を迎えつつある。今や梅原先生は微かな、だが莞爾たる笑みを浮べていらっしやるに違いない。

(国際日本文化研究センター名誉教授)